

【講演録】

高等教育の拡充と都市の再編

―旧制彦根高商の建築遺産―

木方 十根

皆さんこんにちは。この度は滋賀大学講堂の改修工事の竣工、おめでとうございます。私は鹿児島大学建築学科の木方十根と申します。今、後ろに映っているのは、鹿児島大学工学部稲盛会館という講堂です。本学部出身の稲盛和夫氏の寄付により、平成六年に建てられた建物です。設計は著名な建築家である安藤忠雄氏によるもので、卵形のホールが特徴の斬新なデザインです。

稲盛会館は通常の講演のほか、このように学生表彰などといった、学生の晴れの舞台として使われています。このように「講堂」は、学生生活を彩る非常に重要な施設なのです。ですから、多くの大学で、後に名建築として伝えられるような建物が建てられ、時代を経て歴史的建築として大切にされていくのです。

つまり、講堂とは「大学の顔」なのです。滋賀大学を尋ねる人々を迎え入れる位置に建つ講堂が、このたび改修によって、これまで通り、この先も変わらず存在し続けることになったことは、大学の歴史、その存在意義を目で分る形で伝えるという点でとても意義深いことであるとともに、滋賀大学の同窓生の皆様に共有されてきた思い出の風景

を、これからの卒業生の方々も継承していくのだ、という点で、とても大きな意味があると思います。

本日は、これから全国の歴史的な「講堂」を紹介しながら、我が国の高等教育の拡充や都市の再編といった情勢のなかで、滋賀大学の講堂が、歴史的建築としてどのような位置付けにあり、その建築の特徴や魅力がどういった点に見出されるのか、を考えて行きたいと思います。

* * *

表1は、日本国内で、これまでに歴史的建築として知られてきた、大学の講堂の一覧表です。昭和後期には、五十四件の歴史的な講堂が存在していました。しかし現在では、そのうち十六件（表中の網掛部分）がすでに取り壊されてしまい、三十八件となっています。滋賀大学講堂はそうした貴重な講堂の一つ、なのです。

我が国の高等教育制度の歴史と社会の情勢を踏まえて、キャンパス形成の歴史の年代区分を設定すると、このようになります^{〔1〕}（表2）。今に残る講堂を考えるうえでは、

- ① 第三期まで、すなわち「大学令」という法律で大学の増設が進められる以前
- ② 主に第四期、すなわち「大学令」および当時の高等教育拡張政策のもとで様々な学校の整備が進んだ時代
- ③ そして第六期、戦後の新制大学としてキャンパスの整備が進んだ時代

表 1 歴史的建築として把握された我が国の大学の講堂

年代区分	No.	現在	現大学名	建設時学校名	建物名	所在地	建設年代	構造形式	設計者	施工者	文化財指定等
Ⅱ	1	有	京都大学	京都帝国大学	京都大学医学部解剖学教室講堂	京都府京都市左京区	明治35年	1902	木造	文部省(山本治兵衛)	文部省(山本治兵衛)
	2	無	京都大学	京都帝国大学	京都大学文学部文学部講堂(旧文学部)	京都府京都市左京区	明治35年	1902	木造	文部省(山本治兵衛)	文部省(山本治兵衛)
	3	有	日本女子大学	日本女子大学(単)	成瀬記念講堂	東京都文京区	明治36年	1906	木造	田辺淳吉	清水組
	4	有	奈良女子大学	奈良女子高等師範学校	記念館	奈良県奈良市	明治42年	1909	木造	文部省(山本治兵衛)	重要文化財
	5	有	北海道大学	東北帝国大学農林大学	古河講堂	北海道札幌市北区	明治42年	1909	木造	文部省(新山平四郎)	新井新太郎
Ⅲ	6	無	鹿児島大学	鹿児島高等農林学校	(鹿児島講堂)	鹿児島県鹿児島市	明治44年	1911	木造	文部省(新山平四郎)	重要文化財
	7	無	山形大学	米沢高等工業学校	(工学部講堂)	山形県米沢市	明治44年	1911	木造	文部省(山本治兵衛)	
	8	無	京都大学	京都帝国大学	(工学部工学教室講堂)	京都府京都市左京区	明治44年	1914	木造	文部省(山本治兵衛)	
	9	無	千葉大学	千葉高等商業学校	(商業部講堂)	千葉県千葉市	大正3年	1914	木造	文部省(新山平四郎)	
	10	有	群馬大学	群馬高等工業学校	工部部記念館	群馬県桐生市	大正5年	1916	木造	文部省(新山平四郎)	
	11	無	新潟学院大学	新潟女子学院	(新潟女子学院講堂)	新潟県新潟市	大正6年	1917	木造	文部省(新山平四郎)	
	12	無	京都大学	京都帝国大学	(教養部新館)	京都府京都市左京区	大正7年	1918	木造	武田五一	武林工務店
	13	有	日本大学(単)	日本大学(単)	大講堂	東京都世田谷区	大正8年	1919	鉄骨造	佐藤功一	
	14	有	国士館大学	国士館	大講堂	東京都世田谷区	大正8年	1919	鉄骨造	佐藤功一	
	15	有	西南学院大学	西南学院高等部(単)	西南学院大学博物館(ドン・ジャー記念館)	福岡県福岡市早良区	大正10年	1921	煉瓦造	佐藤功一	国登録文化財
Ⅳ	16	無	福岡大学	福岡高等商業学校	(経済学部講堂)	福岡県福岡市東区	大正11年	1922	木造	文部省	市町村指定文化財
	17	無	山口大学	山口高等商業学校	(経済学部講堂)	山口県山口市	大正12年	1923	木造	吉田静文(部技手)	馬土組
	18	有	宇都宮大学	宇都宮高等農林学校	大講堂	栃木県宇都宮市	大正13年	1924	木造	文部省	
	19	有	法政大学	法政高等商業学校	経済学部講堂	滋賀県彦根市	大正13年	1924	木造	文部省	
	20	有	東京工業大学	東京工業大学	旧講堂?	東京都大田区	大正14年	1925	木造	内田祥三、黒田日出刀	清水組
	21	無	岐阜大学	岐阜高等農林学校?	大講堂(安田講堂)	岐阜県岐阜市	大正14年	1925	木造	内田祥三、黒田日出刀	清水組
	22	有	東京帝国大学	東京帝国大学	講堂	東京都文京区	大正15年	1926	木造	文部省	国登録文化財
	23	有	姫路工業大学	姫路高等学校	講堂	兵庫県姫路市	大正15年	1926	木造	文部省	国登録文化財
	24	無	熊本大学	第五高等学校	(中央講堂)	熊本県熊本市中央区	昭和2年	1927	木造	佐藤功一、佐藤武夫	戸田組
	25	無	南山大学	南山高等商業学校	(工学部講堂)	東京都新宿区	昭和2年	1927	RC造	伊東忠大	竹中工務店
	26	有	早稲田大学	早稲田大学	大隈記念講堂	東京都新宿区	昭和2年	1927	RC造	佐藤功一	清水組
	27	有	一橋大学	東京商科大学	講堂	東京都港区	昭和3年	1928	RC造	佐藤功一	竹中工務店
	28	有	武蔵大学	武蔵高等学校	講堂	東京都練馬区	昭和4年	1929	RC造	文部省	国登録文化財
	29	有	関西学院大学	関西学院	関西学院中央講堂	兵庫県三田市	昭和4年	1929	木造	文部省	国登録文化財
	30	有	信州大学	上田専ら専門学校	轉機記念講堂	長野県上田市	昭和5年	1930	RC造	増田建築事務所	昭和土木
	31	有	京都工芸繊維大学	京都高等工芸?学校	本館及び講堂	京都府京都市左京区	昭和5年	1930	RC造	増田建築事務所	清水組
	32	有	東京女子医科大学	東京女子医学専門学校	臨床講堂	東京都千代田区	昭和5年	1930	RC造	文部省	国登録文化財
	33	無	一橋大学	東京商科大学	(一橋講堂)	東京都千代田区	昭和7年	1932	RC造	文部省	重要文化財
Ⅴ	34	有	お茶の水女子大学	東京女子高等師範学校	講堂	東京都文京区	昭和7年	1932	RC造	文部省	重要文化財
	35	有	神戸大学	神戸商業学校	講堂・総務部・チャペル	兵庫県神戸市灘区	昭和8年	1933	RC造	文部省	大林組
	36	有	神戸大学	神戸商業学校	講堂	兵庫県神戸市灘区	昭和8年	1933	RC造	文部省	重要文化財
	37	有	立女子大学	立女子専門学校	講堂	東京都千代田区	昭和9年	1934	SRC造	前田健二	戸田組
	38	有	東京農工大学	東京高等農林学校	講堂	東京都府中市	昭和9年	1934	SRC造	東京大学営繕課	戸田組
	39	有	西南学院大学	西南学院	ロフ講堂	福岡県北九州市小倉北区	昭和10年	1935	RC造	クォーリ	大倉土木
	40	無	中央大学	中央大学	(講堂)	東京都千代田区	昭和10年	1935	SRC造	阿部美樹志	安藤組
	41	無	国学院大学	国学院大学	(講堂)	東京都文京区	昭和10年	1935	RC造	曾根・中塚建築事務所	
	42	有	慶応義塾大学	大塚女子高等医学専門学校	本館講堂	大阪府枚方市	昭和12年	1937	RC造	佐藤功一建築事務所	
	43	無	關西大学	關西大学	(本館講堂)	京都府京都市左京区	昭和12年	1937	RC造	佐藤功一建築事務所	
Ⅵ	44	有	京都大学	京都帝国大学	西部講堂	京都府京都市左京区	昭和12年	1937	木造	杉山雅則(リーモン)下建築事務所	清水組
	45	有	東京女子大学	東京女子大学(単)	講堂・礼拝堂	東京都杉並区	昭和13年	1938	RC造	清水組	国登録文化財
	46	有	東京大学	第一高等学校	教養部講堂	東京都目黒区	昭和13年	1938	RC造	内田洋三、清水幸重	多田工務店
	47	有	青山学院大学	青山学院専門部	P.S.講堂	東京都渋谷区	昭和13年	1940	RC造	W.M.クォーリス	清水建設
	48	有	東京工業大学	創立70年の記念講堂	創立および事務棟	東京都目黒区	昭和33年	1958	RC造	清水組	DOCOMOMO Japan
Ⅶ	49	有	九州工業大学	九州工業大学	豊田講堂	福岡県北九州市戸畑区	昭和35年	1960	RC造	清水組	大坂建設
	50	有	名古屋大学	名古屋大学	豊田講堂	愛知県名古屋市中村区	昭和35年	1960	RC造	清水組	竹中工務店
	51	有	千葉大学	千葉大学	豊田講堂	千葉県千葉市中央区	昭和35年	1960	RC造	清水組	竹中工務店
	52	有	日本歯科大学	新島歯学部5号講堂	新島歯学部5号講堂	新潟県新潟市中央区	昭和48年	1973	RC造	園田新一設計事務所	鹿島建設
	53	有	星学館大学	星学館大学	旧自然科学記念講堂	三重県伊勢市	昭和56年	1981	RC造	川添清・堀城建築研究所	鹿島建設
Ⅷ	54	有	奈良教育大学	奈良教育大学	講堂	奈良県奈良市	昭和62年	1987	RC造	川添清・堀城建築研究所	鹿島建設

以上の三つの時代が主に注目すべき時代となります。

今に残る、第Ⅲ期までの講堂の代表例としてはまず、日本女子大学の成瀬記念講堂、そして奈良女子大学記念館、以上東西の女子大学の記念講堂が挙げられます。これらの講堂が大切に残されてきた背景には、女子大学は過去の大学再編のなかでも、独立性を保ちながら、比較的安定的に継続してきたことが考えられます。日本女子大学成瀬記念講堂は、

ハンマービームと呼ばれる木造の屋根架構の形式、奈良女子大学記念館は、ハーティンバーと呼ばれる白

壁に木の筋交いの入った形式が特徴で、ともに西洋中世の、教会堂や民家に範をとった建築様式となっています。

このほかには、北海道大学の前身である旧東北帝国大学農科大学の古河講堂、群馬大学の前身である旧桐生高等工業学校の本館及び講堂、があります。これら二校は、ともに地方部の産業拠点に設立された農工系の専門学部あるいは専門学校であり、当時の高等教育政策を反映した建物であるといえます。従っていずれの

建物も、地域産業に根ざした学校のシンボルとして、大切にされてきたものといえます。

今に残る大学の講堂の最古の例は京都大学の医学部解剖学教室講堂、現在は医学部資料館となっている建物です。学問の進歩に伴い、つねに更新が行われてきた旧帝国大学のキャンパスの只中に、こうした建物が残されているのは、極めて貴重な例だと言えます。

このような、今に残る第Ⅲ期までの講堂の特徴を整理すると以下のようになります。

- ① 建設時の学校種別は、帝国大学の他、女子学校、地方の農工系の官立専門大学・専門学校、となっています。
- ② 建物の構造種別は全て木造です。
- ③ 設計と施工は、私立の例を除き、大半が文部省直轄で行われており、
- ④ 重要文化財を含む、文化財指定・登録が進んでいます。

次に、時代を先回りして、戦後に建てられた講堂について、見て行きたいと思います。

戦後に建設された講堂は、ここに挙げられたもの以外にも、数多く存在していますが、本リストには、築後五十年余りを経て、すでに歴史的建築としての価値が認められているものを挙げています。

代表的な例としては、東京工業大学の七十周年記念講堂、名古屋大学豊田講堂が挙げられます。東京工業大学七十周年記念講堂は、建築家で

表2 高等教育史およびキャンパス形成史の年代区分

区分	年代	区分根拠
第Ⅰ期	～1885 (M18)	森文政以前
第Ⅱ期	1886 (M19)～1902 (M35)	森文政～専門学校令以前
第Ⅲ期	1903 (M36)～1917 (T 6)	専門学校令～大学令以前
第Ⅳ期	1918 (T 7)～1936 (S 11)	大学令～日華事変以前
第Ⅴ期	1937 (S 12)～1945 (S 20)	日華事変～終戦
第Ⅵ期	1945 (S 20)～	戦後

木方十根、『近代日本における高等諸学校の立地と計画に関する研究』、名古屋大学博士論文、2004

あり同校の教授であつた清家清^{せいけいきよし}による設計、名古屋大学豊田講堂は、当時の新進気鋭の建築家で、後に東京大学教授として国際的に活躍した横文彦のデビュー作です。

ともに、いわゆるモダンムーヴメントと呼ばれる近代建築運動のなかで時代を画した建築であり、比較的新しい建築であるにも関わらず、すでに建築史上、高く評価されている講堂です。

戦後の代表的な講堂の特徴を整理すると以下になります。

- ① 建設時の学校種別は全て新制大学ですが、創立記念や、新制大学の中心的建物としてのシンボル性を持つているのが特徴です。
- ② そして寄付建物や記念建物として、国立大学であっても通常の文教施設整備事業とは別の枠組みで建設されたこともあって、有名建築家が設計に関与し、その結果、高い歴史的評価が与えられているものがあります。
- ③ その結果、比較的新しい建築であるにも関わらず、登録文化財としての登録も始まっています。
- ④ 構造種別は、すべて鉄筋コンクリート構造となっています。その背景には技術的進歩とともに、戦後に制定された建築基準法によって、大規模な木造建築の建設が難しくなったことの影響が考えられます。

さていよいよ、滋賀大学講堂を含む、第Ⅳ期の講堂の例を見ていきましょう。今に残る歴史的な大学講堂としては、この時期の例が最も多くなっていますが、この背景には、大正中期、原敬内閣のもとで進められた高等教育拡張政策により、単科大学、あるいは私立大学が正式に大学

へと昇格したことや、専門学校についても、農業・工業に加え商業系の専門学校の増設が行われたことがあります。滋賀大学の前身である旧彦根高等商業学校も、こうして設立された学校の一つです。

以上のことから、第Ⅳ期の講堂が建つ学校の種別は、地方の官立専門学校、単科大学、都市部の私立大学など、種類に加え、地域分布や設立主体の面でも多様になっています。

建物の構造種別の点では、特にこの時期、大きな変化が現れます。一九二三年の関東大震災以降、とくに大都市部では、防災の観点から、これまで主体であつた木造の講堂の建設がほとんど見られなくなり、鉄筋コンクリート造へと替わって行きます。

なお、滋賀大学講堂の竣工は、一九二四年と関東大震災直後ですが、木造で実現しています。従って、歴史の大きな流れのなかでみると、滋賀大学講堂は、今に残る最も後期の木造講堂の例として位置付けることができます。

もう一つ、関東大震災後の講堂建築の大きな変化を指摘したいと思います。「大学令」に基づき、念願の大学昇格を果たした官立単科大学や、私立大学などは、学外からの寄付を受入れ、記念碑的な建築として立派なコンクリート建築を建設したのです。

東京大学安田講堂、一橋大学兼松講堂、神戸大学出光記念講堂などは、建物名に貢献者の名前を冠する記念建築です。早稲田大学大隈講堂は、創設者・大隈重信の逝去を機に、同窓生などの寄付を募り建設した記念建築です。

また東京にある三つの講堂は、いずれも関東大震災からの復旧を象徴

した建物でもあります。

東大安田講堂、早稲田大学大隈講堂は、それぞれの建築学科の教授であつた内田祥三、佐藤功一^{よさず}によつて設計されています。一橋大学兼松講堂は、東京帝国大学の伊東忠太の設計です。

デザインの点を見ると、東京大学安田講堂、早稲田大学大隈講堂は、いずれも高い塔を持ち、垂直性の強いゴシック・リヴァイヴァルの系統のデザインです。これに対し、ともに商業系の単科大学として昇格した、一橋大学の兼松講堂、神戸大学の出光記念講堂は、いずれも、より古い時代の様式を復興したロマネスク・リヴァイヴァルの系統のデザイン^ンの、より重厚な印象の建物となっています。

もう一つ、兼松講堂、出光記念講堂について指摘しておくべきことは、いずれも、昇格を機に新たに整備された、郊外の新キャンパスに建設された、ということです。東京大学や早稲田大学が今となつては都心の真只中に存在するのに対し、新設の商科大学はいずれも郊外の、現在では高級住宅地となっている地域に存在しています。第Ⅳ期の新設講堂の多くは、このように郊外の新キャンパスに建設された、というのも、知っておくことが重要です。

以上、第Ⅳ期の講堂の特徴をおさらいすると、

① 建設時の学校種別は、商業系を含む地方官立専門学校のほか、単科大学、私立大学など、当時の高等教育拡張政策を反映して多様である、

ということ。

② 建物の構造種別が、関東大震災を期に、木造中心から鉄筋コンクリート中心へと変わることを。

③ 大学昇格などを期に、寄付によつて記念講堂が建てられ、その多くが有名建築家・有名教授によつて設計され、高い歴史的評価を得ていること。

④ そして最後に、郊外の新設キャンパスでの建設が多くなつたこと、以上となります。

* * *

それでは以上の整理をふまえて、滋賀大学講堂の歴史的価値と魅力について、考えてみたいと思います。

これについては建物そのものの価値と魅力を考える前に、まず第一に「立地」、すなわち彦根城の内濠のほとりに建つ、という恵まれた周辺環境について、指摘せざるを得ないでしょう。先に述べたとおり、滋賀大学講堂が建つた第Ⅳ期、すなわち大正期には、大都市の中心部はすでに過密になりつつあり、震災の影響もあつて多くの大学が郊外に移転を始める時期でした。そうしたなか、彦根の城下町に設立された彦根高等商業学校は、彦根城のお膝元の一等地にキャンパスを構えることになつたのですが、このことは将来にわたり都市と大学が強い関係を持つことにつながる重要なことであつたと思います。そして国宝・彦根城を間近にする場所に、近代の洋風建築である滋賀大学講堂が建つ様子は、我

が国の建築文化の奥深さを示す、大変貴重な景観であると言えます。

二つ目の歴史的価値と魅力は、最も後期の木造講堂である、ということとです。

先に述べたとおり、関東大震災以降、主に耐火の観点から、大規模建築が木造から鉄筋コンクリート造などに置き換えられています。しかしながら、元来日本の建築文化は木造を主としてきたわけですし、また昨今では、環境負荷低減の観点から大規模木造建築が再評価されるようになっていきます。地球環境の持続可能性に対して、建築が与える影響を考えるうえでも、木造の講堂を大切にして使い続けることには、大きな社会的意義があるものと思います。

そして最後に、清楚な古典系のデザイン、ということを挙げたいと思います。滋賀大学講堂の正面のような、切り妻屋根の妻面を正面に向けた構成を、一般に「神殿正面」(テンブル・フロント)と呼びます。これはギリシャ神殿の形式に由来しますが、滋賀大学講堂は、この神殿正面を純粹、かつ簡素な形で表しています。

さらに、玄関脇には、フルーテイングと呼ばれるミゾを付けた円柱が仕込まれています。これは、写真の「アテネ人の宝庫」のようなギリシャ建築、しかもその最も簡素な例を範にとった「グリーク・リヴァイヴァル」すなわちギリシャ復興様式の流れに属する古典系のデザインです。

玄関脇の柱は、階段上部から直接立ち上がっています。これは先ほどの「アテネ人の宝庫」のほか、パルテノン神殿などにみられる「ドーリア式」の柱の特徴です。やや太めの印象、その直径と高さの比率からみ

ても、玄関脇の柱は簡素化されたドーリア式であると見なして間違いないと思います。ただし柱の頭部の装飾は省略されています。また「ドーリア式」の柱にみられる下部に対して上部がすばまる形も省略されています。そもそも「ドーリア式オーダー」として柱と不可分な「エンタブラチュア」すなわち梁の表現も大幅に簡素化されています。こうした点は、すでにこの建物のデザインが、抽象化に向かうモダン・デザインの影響を受けていることを示しています。

この点は、滋賀大学講堂のデザインを考えるうえで、大変重要な点です。グリーク・リヴァイヴァルの採用も、木造を前提としつつ、簡素化・抽象化に叶うもの、という考えに基づき、採用されていたと考えられます。同じ木造でも、それ以前の時代の女子大学の例で見られたような、装飾的な中世の様式とは、方向性が異なるわけです。



「アテネ人の宝庫」
(デルフォイ、ギリシャ) ©Smoddy CC BY-SA 3.0)



滋賀大学講堂(滋賀大学経済学部附属史料館提供)

滋賀大学講堂のデザインを、同時代の一橋大学の兼松講堂と比較してみよう。先述のとおり、こちらは鉄筋コンクリート造の「ロマネスク・リヴァイヴァル」、ささほどの古典系のデザインに対し、中世の建築に範をとったデザインです。

どっしりとした厚い壁や重厚なアーチが特徴のロマネスク・リヴァイヴァルは、スペイン人宣教師達が築いたミッシェン、すなわち伝導所や修道院の建築遺産が残り、かつ日本と同じく地震があつたため、壁勝ちなコンクリート耐震構造が導入され始めていた、カリフォルニアの大学キャンパスで、特に流行したデザインでした。

一方、ギリーク・リヴァイヴァルは、ヨーロッパやアメリカにおいて、もう少し古い時代に広まったデザインですが、特にアメリカでは、木造の建築として、特に住宅や学校の建物に、幅広く取り入れられたデザインです。

このように、シンプルな切り妻屋根の形式を取っている点では、滋賀大学講堂と兼松講堂は同じではありませんが、ギリーク・リヴァイヴァルとロマネスク・リヴァイヴァルということからすれば、全く出自の異なるデザインといえます。

デザインの本質的な違いを理解するために、窓に注目してみよう。ロマネスク様式の特徴の一つには、「強弱の交替」、すなわち天井を支える大きなアーチや柱、窓を穿つ小さなアーチや柱、こうした要素が強弱のリズムをとりながら連続する、というものがあつます。こうした古拙ともいふべき愛くるしさ、親しみやすさが、ロマネスク様式の魅力です。

兼松講堂は、こうしたロマネスクの様式の特徴を、やや簡略化していますが、正確になぞっていることが分かります。

これに対し滋賀大学講堂はどうでしょうか。その側面をみると、一階・二階ともに二つで一組となつた縦長の窓を、上下階に連続する窓枠で大きく囲い、開口部をひとまとまりのパネルのように見せています。そしてそのパネルは、規則正しく均等に配列されています。これによつて「虚」である開口部と「実」である建築の骨格部分が、乱れることなく均等に並んでいるかのような側面の構成になっています。こうした配列における純粋な美を指向するデザインこそ、ギリーク・リヴァイヴァルの特徴、ギリシャ神殿にみる、配列の原理^②になつたものであるといえます。

一方で、アーチ型の屋根窓や、棟の中央部に付加された塔の部分には、純粋なギリーク・リヴァイヴァルというよりは、ルネサンス様式を範としたデザインの要素がみられます。いずれにしてもすべての装飾的な要素は古典系のデザインが主になっています。

内部空間をみてみましょう。プロセニウム・アーチと呼ばれる、講堂の空間から舞台を区切る部分にも、ギリシャ建築の要素ではない「アーチ」が用いられています。しかしながら兼松講堂のプロセニウム・アーチと比較してみると、滋賀大学講堂のプロセニウム・アーチは極めてシンプルです。兼松講堂のアーチでは、ロマネスク建築の装飾要素である稲妻型の模様や組紐文様が連続しています。

舞台から講堂全体を見返してみると、滋賀大学講堂のデザインの特徴がさらに良く分かります。ご覧のとおり、客席空間の床から二階のバルコニーを貫通して天井を支える柱が、林立しています。これらがすべて独立柱として、シンプルに見えるように工夫されているのも、まさにグリーク・リヴァイヴアル的な表現です。

現在は改修によって少し雰囲気が変わってしまいましたが、竣工当初の彫りが深く規則正しく構成された格天井も、グリーク・リヴァイヴアルの端正で清楚な雰囲気醸し出すのに貢献していたと思われます。

なお現在の講堂の舞台には、先ほどの開校式の写真にはなかった後部スクリーンが設置されています。これ自体も古典系のデザインの立派なものです。イオニア式の柱を二本で一組とする形式は、盛期ルネサンスからバロックの様式に多くみられるもので、同じ古典系ではあるものの、建物全体のグリーク・リヴァイヴアルのデザインとは、やや傾向が異なるものです。

同じように、正統的なグリーク・リヴァイヴアルとは言えないものの、この建物の魅力を高めている要素が、階段の手すりの支柱にみられるような、古典の装飾要素を抽象化したデザインです。

入口の部分の解説でも述べましたが、こうした点には、モダン・デザインの萌芽を見ることが出来ます。一九二四年という竣工年代を考えると、最先端のデザイン要素を取り入れたものと評価できそうです。清楚なグリーク・リバイバルの採用とともに、こうした細部において、文部省の営繕組織のなかに芽生えていた新たな感性を見て取ることが出来る

のです。

* * *

つまり、滋賀大学講堂は、シンプルですが見所が多い建物です。近世の日本建築を代表する彦根城とともに、滋賀大学講堂で近代建築の面白さを味わって頂ければ、とても豊かな建築探訪になると思います。皆さんぜひ、滋賀大学講堂にも足を伸ばしてください。

注

(1) 木方十根、『近代日本における高等諸学校の立地と計画に関する研究』、名古屋大学大学院環境学研究科・博士学位請求論文、二〇〇四年九月、および木方十根、『大学町』出現―近代都市計画の錬金術―、河出書房新社、二〇一〇年

(2) アレクザンダー・ツォニス、リアーヌ・ルフエーヴル、『古典主義建築―オーダーの詩学』、鹿島出版会、一九九七年

【付記】この講演録は、令和2年企画展「地域とともに歩む彦根高等商業学校」の関連講演としてHPで公開した、鹿児島大学大学院理工学研究科工学専攻教授木方十根氏によるビデオ講演を記録したものである。